

に編成中でしたが大本營の方針が急遽レイテ決戦に変更したため（台湾沖航空戦の大戦果の誤報による）米空軍制圧下のレイテに上陸することになったのです。しかしその上陸予定地点が接岸不可能のためレイテ北端の海岸に擱座させ上陸しました。ため兵員は上陸できたのですが肝心の重砲、兵器、弾薬、食糧などはすべて空襲に曝され使用不能になりました。

折角優秀な兵団も徒手空拳ではいかんとも仕難く、レイテ決戦の混戦の中に紛れて消えていったのです。

旅団長栗栖少将は第二十六師団長代理となり昭和二十年七月十七日戦死、後中将。後任旅団長・冲静夫少将は昭和二十年七月三日戦死、中将。連隊長金田長雄大佐は、昭和二十年七月十二日戦死、少将。昭和二十年六月の生存者は金田大佐以下十八人に過ぎず、以後全員戦死のため、実際の戦闘状況などは不明と云う悲惨な結末に終わったのであります。

レイテ作戦担当第三十五軍司令官鈴木宗作中將も戦死している。レイテに行った同年兵は一人も帰っておりません。

比島、バターン半島の戦い

京都府 西村 頼 夫

私の生家は米作と養蚕の農家で、父母と祖母に男三、女五の八人兄弟の十一人家族でした。私は、その長男として生まれ、学校卒業後、京都で牛乳販売店に二年間勤めたあと大阪へ行き、鉄工の職業訓練を半年間受け、大阪市内の町工場に勤めていました。

十九歳になった時に親のすすめで舞鶴の海軍工廠に就職しました。

昭和十四（一九三九）年の徴兵検査の結果、甲種合格になりました。徴兵官から「馬の扱いができるか」と聞かれ「できません」と答えました。

昭和十五年一月十日、京都深草の第十六師団の野砲兵第二十二連隊（現在、跡地は警察学校になっていきます）第十中隊に入隊しました。

当時の師団長は有名な石原莞爾中将でした。私的制裁については特にきびしく禁止するよう命ぜられていました。

三カ月後の一期の検閲めざして教練が開始されると同時に、内務のきびしい「しつけ」が始まりました。古年兵は奈良、兵庫出身が三年兵、三重、滋賀、奈良出身が二年兵でした。石原師団長の私的制裁禁止も表向きで、初年兵は教育という「しつけ」に泣かされる毎日でした。「鶯の谷渡り」「対抗ビンタ」「軍人勅諭の暗誦」「戦陣訓の暗誦」等々でした。

ある日の朝食を前に、二年兵が「ちょっと待て！」と二人で食卓を持ち上げて引っ繰り返して、私たちが初年兵は欠食の上、跡片付け掃除をやらされ、食缶返納を駆け足でやり、教練整列の上、空

腹抱えての早駆けには全く参りました。

また食事当番で、炊事場前で食缶返納のための食缶洗いの最中に、残飯を手ですくって食べた初年兵が見付かり、炊事兵（万年一等兵がいた）にビンタをとられた事もありました。

一番困った事は古年兵の洗濯物を洗って、乾かし場に乾かしていた洗濯物が誰かに盗まれた時は本当に困りました。古年兵に「盗まれました」と報告すると、ビンタを五、六発喰らったあと「盗られたら盗り返してこい」とどやされました。

散々いじめられた末に員数外の物で補充してくれましたが、軍隊の不思議な一面を思い知らされたものです。

また、ある日、陣営倉庫（兵営生活上の用具を格納する）の掃除の使役に出ましたが、掃除の仕方が悪いと係の上等兵が怒り出し、初年兵を並べて台の上立ってホーキの柄が裂けるまで兵の頭を叩くのです。台の上から叩くので兵の後頭部に当たり、その痛さに悲鳴が出るほどでした。洗

濯物乾し場で盗られますと員数が不足で内務検査が通りませんので、他から盗んでこなければなりません、盗むところを見付かったらそれこそまた大変なことになります。初年兵では何とも策がありません、死ぬ程叩かれて勘弁してもらおう以外ありませんでした。

酒保には甘味品等が売ってありますが、そこは古年兵が占拠していて、初年兵が入っても売り切れで買う物がありませんでした。

野砲隊の初年兵は武器として三八式騎銃一丁が支給されましたが、歩兵と違って実際に使うことはありませんでした。

昭和十五年四月十三日に一期の検閲が終わり、基本的な事は一応済みました、これからは専門的な事を学ぶわけで「特業教育」という段階に入ります。

野砲連隊は十個中隊編成で、私は第十中隊に入り一〇センチ口径の榴弾砲四門が主要武器です。

私は観測班に入り、観測手三人と通信手四人で一組を作り、一車輛に器具を乗せませす。観測には測遠器という距離を測る長さ一メートルのレンズで、最前線に出て敵との距離を測り通信手に知らせませす。レンズを覗くと鉄帽も邪魔になるので鉄帽はアミダに被ります。防毒面も外して覗きませす。車輛には小銃、防毒面も観測器具と共に積んだませました。

野砲は馬六頭でひくので馬の世話は兵隊の主な仕事になります。中隊の馬の中に支那事変で手柄を立てたとして勲章を貰ったと称される大柄の馬が一頭おりまして、気性が荒く、兵隊が世話するうちに前脚で抱き付くやら噛む癖があり恐れられていました。この馬は出征する時は内地に残されました。

昭和十六年三月、祖母が亡くなり、葬式に出るため帰宅が許されました。

三年兵の中に「ノモンハン」の生き残りがおられました。間もなく満期除隊されましたが二年兵

とは違い温和しい方達でした。

同年七月十一日、砲兵一等兵になりました。ノモンハンの後仕末に満州に行くんだと注射を二回打たれましたが、南方の映画を見せられたので南方行きだと噂していましたら、再び注射を二回打たれ、どこかに出動するのは間違いないと思いました。

そうしたら昭和十六年十一月十七日、南方行きが本番になり、屯営（京都）を出発しました。

十一月二十日、大阪港で旧式の五〇〇〇トンの貨物船に乗船、大連で牧草（馬用）を積み込み、さらに上海の呉松に寄り、飯田棧橋でさらに馬糧を積み込み、十一月三十日台湾高雄に入港しました。ここで船の行先が開封されたそうです。大東亜戦の開戦目前でした。

出征直前に野砲第二十二連隊は従来の十個中隊から六個中隊編成に変わっていました。

出征前には三重県の海岸で敵前上陸の演習をや

りました。上陸用舟艇に乗って接岸（砂地に乗り上げ）すると銃を持って完全武装で飛び降りる。場所が悪いと海に飛び込む時もありました。

昭和十六年十二月二十四日、リンガエン湾に上陸しました。夜でした。敵弾は来ず曳光弾が一回夜空に飛んだだけ、敵の飛行機も二機飛んで来ましたが攻撃はなく去って行きました。

上陸してから早速、近くの民家の屋根の上に登り、観測器を据えて敵の集団を発見しましたが、測定距離は一三、〇〇〇メートルもあり問題にせずでした。

そのうち観測班長（伍長）がドイツ製の八倍の双眼鏡で覗いていましたが、突然「敵戦車発見！」と大声を立てました。「スワ大変！」と早速砲撃用意です。二二倍の測距器で見たら、なんとそれは「水牛発見」ということで一件落着し、これには観測班長の伍長殿の面目無しでした。

宿営するべく準備に入った途端、敵の「ドラム缶」砲弾（二〇〇―二四センチ）が一発落下し、同

年兵の杉本太郎君が靴磨き中に破片が当たり即死、部隊最初の戦死者となったので、初めて戦地を実感しました。同夜火葬にしました。

マニラ市が陥落したら、米比軍が続々とコレヒドール半島に逃げ込むのを、日本軍はマニラ陥落を祝ってこれを無視したつけが、あとになって思わぬ大苦戦を強いられることになりました。昭和十七年正月前、サンフェルナンドに我々はいました。第六十五旅団がバターン攻略の主力となったのですが、この部隊は元々警備専門の旅団でしたので損害続出で、攻撃は失敗でした。

第十六師団はバターン攻撃の主力となったのですが、要塞化された米軍陣地は頑として日本軍の進出を阻止しました。

ある日忽然と一報道班員が我が隊を訪れました。腰に一丁拳銃を携えただけの姿です。「福知山の第二十連隊は全国に名だたる健脚部隊と聞いていたが、バターンの山を登り切れずにいるのは

どうしたことか？」と尋ねてきました。作家の火野葦平でした。

当時の私は一兵士であり、その質問には答えられなかったのですが、戦後聞いたところによると、米軍のリーダー網に阻まれて死者が続出しました。この部隊は補充兵か召集兵だけの年寄り部隊だった事が分かりました。第二十連隊の二個大隊が海上から背後に上陸しようとしたましたが全滅させられたそうです。

事実、私らがマリベレス山の南側で見た光景は惨状そのもので、戦死者の中に三人の日本兵がおびえた顔で重機関銃の銃身だけを必死に抱えていました。わけを聞くと菊の御紋章があるので必死に守っていたそうです。

米軍はリーダー網で日本軍を捉え、木と木の間に電線を張り、これに触れると照準を決めた砲が発射される仕組みになっていたそうで、ちょっとやそつとでは攻められない陣地だったそうです。

狙撃兵が樹上から狙い射ち、そういう堅固な陣地に加え、急峻な地形は我が軍の攻撃を阻んでいました。

砲車の前進には、台湾出身の高砂族の人達が切り払ってくれた山道を登り下りして進撃しましたが、六頭立ての砲車が進んだ路を振り返ると恐ろしい程の急な坂道でした。

そのうち珍しい光景に遭遇しました。無数に置き去られた米軍の貨物自動車のエンジンだけを取り外し、その車体だけを深い谷底めがけて次から次へと打ち落としていました。取り外したエンジンは内地に送って高速艇のエンジンに使うのです。

また米軍のリーダーは内地に持ち帰り、房総半島の先端に設置して本土防衛に終戦まで使ったそうです。

ジャングルの中に一本の路が開かれています。そこへ行くと必ず米軍の猛射が始まり犠牲者が出るので不思議に思っていました。後で判明した

のですが、リーダー網が張られて、その上照準が決められた武器が自動式に発砲される仕組みになっていたそうです。この仕組みは橋梁などに設置されていましたので部隊の損害は多大でした。

マリベレス山は高さ一一〇〇メートルで、そこには米軍の観測隊が居たようで、第二十連隊の二個大隊が全滅しています。コレヒドールも陥落して捕虜が大勢出てきた時に、その中には二、三人の日本兵も混じっていたそうです。

私がバターン半島の先端目指して行進している時に、たまに射ってくる砲台がありました。その砲台には迷彩がしてあったのを覚えていました。

バターン半島の岬に砲列を敷いて、コレヒドール島の砲台までの距離を測定したら四、一八四メートルあったのを現在でも覚えています。

昭和十六年四月二十九日の天長節までに陥落を目指しましたが無理と判り、京都師団の代りに大阪の第四師団を投入してコレヒドール島に上陸す

べく集中砲火を浴びせました。しかし敵は上陸地点にコルタールを流して点火して防戦していましたが、一部は上陸し、白旗がレンズに見えました。そのうち再び白旗が見え、多数の敵がマリントヒルから続々と出てきましたので「コレヒドールは陥落した」と思いました。

アメリカの缶詰が色々支給されましたが、大きな木箱に入っていました。チキン缶と思ったらアスパラガスでした。乾ブドウ、チョコレートなんかは大きな木箱に薄い紙で大きな塊のまま包まれて入っていました。

その後、私らの中隊はマニラ防衛司令部に配属となり、パシフィックの小学校を宿舎として対空監視や衛兵勤務に就きました。

昭和十七年の初め頃、東条首相が南方視察に来て、マニラホテルに宿泊されました。私は営舎係として衛兵に立っていました。夜明け間近になった頃、一人の坊主頭の眼鏡をかけた軍服姿の年配

の人が玄関から出て、私の方に近寄り「御苦労さん、君はどここの兵隊さんかね」「はい京都です」「ソーカネ御苦労サン」とねぎらいの言葉をかけてくれました。間もなく明るくなると黄色の旗を立てた自動車が来るは、来るは、高級将校が大勢来ました。そして在留邦人会の歓迎会も盛大に開かれました。東条さんの弟と言われた良く似た麻服を着た人や青木厚相、賀陽宮様も見え、それぞれの衛兵に就きました。

アメリカ人で家族連れもいました。聞けば神戸や名古屋で領事をやっていたそうで、抑留されたのですが、山本元帥の死を報じたマニラ日々新聞を見せて「マモナク、センソウ、オワルデショー」と日本語で話しかけてきました。

その後、比大統領の残党討伐がありました。捕らえられず一日で引き揚げました。

昭和十八年五月六日、帰還準備に入りマニラ出港、沖繩までは順調だったのですが玄界灘で「敵

潜！ 発見」で、大きく迂回し、大阪港に入港、原隊で除隊となりました。

その後、入隊前に在職した舞鶴海軍工廠に復職、造兵機工二等兵曹と呼称され、その後、召集は終戦までありませんでした。最終階級は昭和十八年七月二十八日付で陸軍伍長です。

内地で除隊後結婚、二児をもうけました。妻は三年前病死、現在独居で農業を細々とやっています。

息子は地元の会社員で別居していますが、孫を連れて訪ねてくるのが今のたのしみです。

昭和十六年十月頃、歩砲連合演習が三重県の津の海岸であった時に、見習士官で大江季雄さんが来ていました。ベルリンオリンピック棒高跳びで優勝した人で、さすがに背が高いなあと感じた思い出があります。残念ながら比島上陸作戦で戦死されました。